

新版

# 中源線建玉法

第一部 解説

# 新版 中源線建玉法 「第一部 解説」 目次

## 第一篇 解説

1. 売買の練習と上達…………… 4
2. 売買をするための道具…………… 6
3. 上達のステップ…………… 8
4. 驚くべき成果……………10
5. 陳雅山について……………12
6. 後人の研究……………15
7. 大引法に歩がある……………16
8. 実験が大事……………19
9. 現実の売買結果……………21
10. 利用方法について……………30
11. 投資家への提案（1）……………34
12. 投資家への提案（2）……………38
13. 女性投資家からの報告……………40

## 第二篇 中源線のこれから

14. 新時代の取り組み……………43
15. 現代のツールを活用……………44
16. 未来指向の“シグナル配信”……………45
17. 中源線研究会のこれから……………47
18. 中源線に関する情報サービス一覧……………47

# 第一篇 解説

## 1. 売買の練習と上達

中源線そのものの解説に入る前に、相場を行う、つまり「売り」「買い」ということについて、証券会社や商品会社による営業上の説明とは全く違う角度から、基本的なものをいくつか考えてみよう。

それによって、利益を得るためにはどうすればよいかを知り、一般の人が誤った先入観のために失敗を繰り返していることを理解できる。また、必要以上にまわり道しないですむ。売買を合理的に実行するようになるし、目標が定まることによって自分自身の上達を自覚し、大いに励みになるであらう。

まずは、売買を「技術」的な見地で捉えてみる。基本的でありながら盲点となっている売買技法について、あらためて考えてみるのだ。

世のあらゆる技術、たとえばピアノを弾く技術や水泳の技術などと同じように考えればよい。習得は、必ず次のような道筋をたどることになる。

準備——予備知識、心構えなど



練習——基本技術の習得を繰り返して納得する



上達——やり方がわかり、応用が効くようになる



自立——身についたものとなる

こんな当然なことを、一般の投資家が全く実行していないのは、驚くべきことだ。業者やセールスマンの甘い勧誘に乗せられてしまう、といったことよりも、投資家自身の認識が問題なのであろう。

ピアノを買っただけで練習もせず、いきなり演奏会に出る、あるいは、準備運動も練習もせず「手足を動かせば進みますよ」と言われて水に飛び込むのに似ている。大切なのは“いかに手足を動かすか”なのである。

## ——相場技法（そうばぎほう）

相場の知識ではなく、売買の実技のこと。だから材料の分析などは厳密には技法とはいわない。水泳における手足の動かし方、ゴルフにおけるボールの打ち方に相当する「売買のやり方」のこと。

ゴルフ練習場ではボールの打ち方を覚える。ボールを打つことが、ゴルフの基本であり重要だからだ。しかし、それがゴルフのすべてではない。相場においては売買の一部を練習することは不可能で、だから、技法の練習といっても、小さいながら「仕掛けから手仕舞い」までを一貫しなければならない。

昔から、仕掛けを重視した練習方法には、(1) ためし玉から出発する方法、(2) サヤ取り（ヘッジ）の建て玉から出発する方法、(3) 規格化された出発点を決める方法、と3つの系統があるといわれている。

『実践用語・相場技法・基礎事典』より（林輝太郎著、絶版、編者注）

上記の引用にある「3つの方法」とは、以下のとおりである。

- (1) ためし玉から出発する方法——ためしに買って（売って）みて、波に乗れると見極めてから本玉（ほんぎょく）を入れる
- (2) サヤ取りの建て玉から出発する方法——株はコストダウンのやり方、商品なら〔期近（期中）買いの期先売り〕の建て玉から波に乗る
- (3) 規格化された出発点を決める方法——指数、ケイ線などの分析による統計上の確率を信頼して出発点を決め、そのあと波に乗る

いずれも、同じことの繰り返しによって上達していく。だからこの3つのうち、自分の性質に合うものひとつを選んで売買を始めるべきである。

水泳における泳法の違い、平泳かクロールかと同じで、ひとつができるようになれば、水に浮いて進むようになったのだから、ほかの泳法も見よう見まねで下手ながらできるようになる。あとは「上達」である。

相場のプロが行う売買法を分類しても、大きく上記の3つに分類できるから、やはり、これらは売買技法の出発点でありながら、極端にいうと、そのままプロの技法に進んでいくことができるといえよう。

中源線は、3番目の方法に相当する。指数や移動平均線では端数が生じるし、現実の値動きと遊離するために使いにくいという欠点があるが、対象銘柄の価格そのものを見る中源線は、この点で実用的である。私の周囲でいままでにプロが何人も出ていることから、中源線の実用性がわかる。

## 2. 売買をするための道具

次に、売買するための「道具」について考えよう。ピアノの練習にはピアノがなければならぬが、相場においては何なのか。また、楽譜に相当するものは何か——。プロの間でいわれている、「相場師の三種の神器」を見よう。

これは、相場師に必要な3種の道具、「売買の成果を上げるために必要不可欠な3つのもの」で、「場帳」「玉帳」「資料」のことである。

**場帳**（ばちょう）——値動きの記録。自分の売買に有効利用できるような記録の仕方をする

**玉帳**（ぎょくちょう）——自分の売買を記録する。碁や将棋の棋譜に当たるのは売買譜だが、その原型になる記録。損益などの詳細情報も含める。現在の建玉一覧表を特に値板（ねいた）という

**資料**——統計資料、スクラップブック、新聞のとじ込み、グラフなど、客観的なもの。一般資料と専門資料に分かれる

相場の下手なアマチュアは、これらの道具すべてを証券会社や商品会社に依存する。道具は業者に用意させ、自分は客だと威張っているのが、果たして業者が、心の底から顧客の味方をするであろうか。あくま

でも営利事業であり、慈善事業をやっているのではない。

業者目線の道具ではなく、個人が売買で利益を得るための道具を考えれば、上記の「3種の道具」こそ、真に最低限必要なものといえる。

そして、それらの道具を使うにあたっては

**自分で読む 自分で書く 自分で決断する**

ことが大事で、それでこそ自己の向上があり得るのだ。

中源線は、あとで述べるように、長い歴史をもち、多くの人の実践に使用されてきたにもかかわらず、流布本に見られる酒田罫線法の四十八手における売り線、買い線のような、いわゆる「ザル碁」「へボ将棋の手法」の次元に墮落していない。興味本位の視点を許さない真剣な実践者が、売買の基礎技術習得のためにのみ用いてきたことが理由ではないだろうか。

だからこそ、売買の道具として、また系統立った売買方法として確立されたのである。あらためて統計を取ってみても、実際の売買に使用してみても、また中源線を単なる「機械的売買法」として用いる、つまり規定どおりの売買を想定して計算してみても、その優位性は歴然としている。

過去十数年、商品仲買店を経営していたころからの研究部会員で、真剣に売買の上達を望んでいる人たちを対象に、本人の同意を得て、多くの練習と上達の記録を取ってみたが、最も短期間かつ確実に、アマチュアの最大の欠点であるところの「材料探し」や「当てもの売買」から抜け出すことに効果的だったのは、

**中源線による基本技術の習得**

だった。

端的にいうと、中源線を使うことで「目がさめる」のだ。

(1) 売買の出発点を求める、(2) 分割の仕方を覚える、(3) 手仕舞いの要領を体得する、(4) 仕掛けの失敗の処置ができるようになる——これらの上達が非常に早い。あとは、その人の努力による「上達」だけだ。

では次に、アマチュアの欠点の是正ということに目を向けてみよう。

### 3. 上達のステップ

知識的な勉強を相当に積んでいながらも技術に目が向かなかった投資家は、いったん「目がさめる」と抜け出すのが早い。

目がさめる前の状態について、一例を示そう。

あるニュースをきっかけに、A株が暴騰必至、大化けの可能性ありとみて買う。しかしA株の動きは期待に反し、仕方なく「塩漬け」にする。次のニュースでB株を買う、そしてC株……と次第に持ち株は増加する。

資金いっぱいになったあとは、引かされ幅の少ない銘柄を処分して新しい銘柄を買う。次第に騰がってきた銘柄はある程度の利益をみて売るが、売ったあとで暴騰することになる。

常に引かされた銘柄ばかりを持ち、市況好転の際いちばん早く時流に乗る「引かされ幅の少ない銘柄」を適当な利幅で売る、つまり当初に期待した「大化け」が現実には始まったところで売ってしまうのだ。

時流に乗る株を手放し、沈みゆく株を手持ちに繰り入れるというような、「手持ち株の悪化」のための努力を続けて一生を終わる。

信用取引を利用していたり商品相場を行っている場合は、以上の経過が短期間にあらわれ、“泥棒に追い銭”のごとき増し玉が加わる。

こういう投資態度は、売買法を観念的なものだと考えているアマチュアに共通し、個々の人の性質によって多少の偏りはあるものの、例外はあまりない。だから、ここから抜け出すだけで、もう初段の腕前といえるのだ。

へボ将棋でも面白ければよいが、相場においては、それではいけない。

抜け出すには、

銘柄を限定すること

分割売買をすること

見込み違いは処置を早く

ということに気がつくが、それだけでは「知っただけ」で、「できるよう



になった」のでもなければ「上手になった」のでもない。

つまり、実行力をつける方法、上達していく具体的な方法がわからなければ、当然のごとく練習もできない。

それを教えてくれるのが、中源線建玉法である。

中源線建玉法（ちゅうげんせんたてぎょくほう）——名前は古くさいが、変更する必要などない。日本の本間宗久の三昧伝（さんまいでん）が相場  
の聖書といわれながら、何ら具体的な売買法の記述もなく、後人の偽書の  
疑いも濃いのに対し、中源線は簡略ながら売買の一から十までを具体的に  
規定している。

陰線、陽線、分割売買（仕掛けと手仕舞い）のすべてに規定がある。

その規定を忠実に、つまり「機械的に売買」してもよい。だが、途中の  
規定を無視するのもひとつの方法である。分割売買だけを取り入れてもよ  
い。自分の判断で、建玉する数量にメリハリをつけるのもよい。

『第四部 実践と実験』でも述べるが、個別株2銘柄だけを中源線による  
売買で練習し、1年半後には勤めを辞めて売買益だけで生活できるよう  
になった人もいるのだ。もちろん、この人は中源線を使いこなし、自己の売  
買技術を固めるために努力したのだが、売り買いの基準はあくまでも中源  
線である。はじめに述べたように、すんなりとプロに移行できたのだ。

多くの研究者とともに、それぞれが専門銘柄を決めて統計を取ると、あ  
まりにうまくできているので改良の余地はない（のべ数百年の統計。また  
毎年1月に集まって、前年の結果と意見を交換している。後述）。

しかし、規定どおりの売買で利益が出るとはいえ、規定は規定、それを  
ステップとして上達を勝ち取るのは実践者自らの実行力である。

統計と売買を繰り返してきた私たちと違って、これから理解しようとい  
う人は、解説、実験、利用方法、売買経過、成功した人たちの実例などを、  
なるべくたくさん読んで確信を深めることが必要である。それが実行力と  
なるのだ。

では、中源線そのものの説明に入ろう。

## 4. 驚くべき成果

ひとつの系統立った売買の法則をつくる作業も、それを改良する工程も、実際にやってみると、たいへんな仕事である。売買の記録をわかりやすく整理するだけでも、相当な労力を要する。

証券会社や商品会社の顧客別勘定元帳から、売買と株数（枚数）、損益などを復元していく作業などは、あまりのわずらわしさに1時間と続かないものだ。

しかし私たちは、グラフと首っ引きで、規定を変えると結果がどうなるかを確認した。そして、実際に売買してみながら、やりやすいかどうか、現実の効率はどうなっているか——こんな検討を根気よく続けた。

値幅の小さい<sup>もちあい</sup>保合相場  
値幅の大きい往来相場  
一本調子の上げ下げ

銘柄によって、あるいは時期によって、特徴ある値動きが出現する。

あとからなら、よくわかるのだが、これから先がどうなるかというと全くわからない。だから、すべての動きを平均的に捉え、効率の良いルールをつくらなくてはならない。

ある年には大きく利益が出るが、翌年は大きな損失となる……これでは実用性に欠けるのである。

紙の上での計算においても、のべ何十年もの動きについて調べる必要があったし、現実の動きに当てはめる場合は、最低でも5年間について実際の売買値を拾って手作業で計算した。

そんな重労働の中、つい勢いでいろいろとやってみたくなかったが、単なる思いつきで決めるのは非常に危険だから、細心の注意を払った。

中源線の改良についても、慎重な姿勢を維持することに努めた。

あとで詳しく述べるが、小豆のたった1枚ずつの売買や、株でも1銘柄を追う1,000株単位の売買で、手数料を差し引いても年間で相当な利益を出すことができるようになった。ほんとうに驚くべきことだと思う。

信じられないかもしれないが事実である。

法則さえ知っていれば小学生でも、方眼紙に終値の折れ線グラフを引くだけで売買できてしまう。

「誰でも簡単に儲かるじゃないか」と言われるかもしれない。しかし、人間には自己主張があり自分の意思を通そうという気持ちがある。だから、法則どおりに売買することは、一見すると簡単なようで容易ではない。実行に際しては、さまざまな心理的抵抗があるのだ。

実際に私も、およそ20年の間で、中源線を捨てようかと思ったことが何度もあり、そのたびに思い直して統計を取り始める——そんなことを繰り返してきたのだ。

そして、商品会社の経営を離れた昭和49年（1974年）1月になってから、何人もの有志の協力を得て、ようやく他人に見せても恥ずかしくないものを完成させたと感じた。

大引値の折れ線グラフを引き、法則は以下のとおり。

1. 陰陽（売り相場、買い相場）の転換の規定
2. 増し玉（買い増し、売り増し）の条件1つ
3. 手仕舞いの条件3つ

これだけで売買していくのである。

結果はというと、着実な成果が上がったのだ。

次項より、陳雅山<sup>ちんがざん</sup>の伝説から実験売買までのひとつおりを解説する。

新版

# 中源線建玉法

## 第二部 本文

夫天宙然示人神、地他然示人明矣。

天地奠位、神明通氣。

有一有二有三、位各殊輩。

回行九区、終始連属、上下無隅。

察龍虎之文、觀鳥龜之理、運諸七政、繫之泰始極亨、

以通璇璣之統、正玉衡之平。

円方之相研、剛柔之相干、盛則入衰、窮則更生。

有実有虚、流止無常。

夫れ天は宙然として人に神を示し、地は他然として人に明を示す。

天地位を奠め、神明氣を通ず。

一有り二有り三有り、位各々輩を殊にす。

九区を回行し、終始連属、上下隅無し。

龍虎の文を察し、鳥龜の理を觀て、諸を七政に運し、之を泰始の極に繫け、

以て璇璣の統を通じ、玉衡の平を正す。

円方の相研する、剛柔の相干する、盛んなれば則ち衰に入り、窮すれば則ち

ち生を更う。

実有り虚有り、流止常無し。

# 新版 中源線建玉法 「第二部 本文」 目次

## 第一篇 序論

1. 傾向の変化…………… 4
2. 実践者の立場…………… 5
3. 強弱観と建玉…………… 6

## 第二篇 騰落

1. 値動きの集約…………… 8
2. 順行と逆行…………… 8
3. 8項目の法示……………10
4. 陰陽分岐点……………11

## 第三篇 建玉

1. 仕掛け……………14
2. 手仕舞い……………15
3. 記号……………16

## 第四篇 運用

1. 増し玉禁止……………20
2. 総資金量……………20
3. 富致……………21

# 第一篇 序論

新版

# 中源線建玉法

第三部 注解と事例

# 新版 中源線建玉法 「第三部 注解と事例」 目次

## 第一篇

第二部 本文「序論」の注解	4
注1～注2	

## 第二篇

第二部 本文「騰落」の注解	6
注3～注13	

## 第三篇

第二部 本文「建玉」の注解	17
注14～注21	
事例1	
グラフ、法示の出現、売買、残玉の例	24
事例2	
グラフ、法示の出現、売買、残玉の例	26

## 第四篇

第二部 本文「運用」の注解	29
注22～注29	



# 第一篇 「序論」の注解

新版

# 中源線建玉法

第四部 実践と実験

# 新版 中源線建玉法 「第四部 実践と実験」 目次

## 第一篇 実践

1. 資金量の規定	5
6枚分の証拠金で1枚建てる	5
まずは規定どおりにやってみる	6
2. 利用方法と最終形態の実例	8
中源線の引き方	8
最初の出動の「なれ」について	9
利用の最終形態の一例	11
休みについて	14
3. 検証とキザミについて	16
統計・調査・確認	16
相場をする者の立場から (1)	18
相場をする者の立場から (2)	20
キザミについて	22
実用的なキザミ (株式・商品)	25
4. 特別規定および特殊研究	28
特別規定とは何か	28
特別規定一覧	29
売買数量の変更	30
1割逆行の特別規定	31
転換の特別規定	32

手仕舞いの特別規定	34
変動キザミについて	36

## 第二篇 実験

1. T-Bond の中源線	38
2. 銀相場中源線研究会報告	39
驚くほどうまくいく倍キザミ	39
転換規定について①	
(例外規定)	39
転換規定について②	
(限月替わり時の取り扱いについて)	39
仕掛けについて①	40
仕掛けについて②	41
手仕舞いについて	41
東京銀倍キザミ転換表	42

## 巻末資料

25年間の売買記録 (1971 ~ 1996 年)	
表 1	45
表 2	45
表の見方	46
実験の記録	47 ~ 122

# 第一篇 実践

## 1. 資金量の規定

### 6枚分の証拠金で1枚建てる

資金量と売買数量については、

総資金量を半分にし、それをさらに3分割する

そのひと単位を1/3と称する

ことになっている。

つまり、6枚分の証拠金で1枚ずつやれということである。60枚分の証拠金なら10枚ずつとなる。

「そんなに余裕をみなくても、1枚ずつの3分割なら3枚分の証拠金で始めればいいじゃないか。証拠金を2倍用意したら、利益率だって半分になる」と言われるかもしれない。

また、中源線を引き、規定を書き入れて検証してみると、「ダマシによる損もあるが、これでやれば必ず利益が出るのだから、2倍も余裕をみなくてもいいと思う」と言われるかもしれない。

あるいは、次のような考え方もあるかもしれない。

「10枚ずつ3段階にわけるのは、めんどくさいし、商売上旅行がちなので、中源線の陰陽転換の法示だけを活用し、売買は30枚ずつとしたらどうだろう。その代わり、資金量は2倍を用意する。つまり、現実には60枚分の資金で30枚ずつを陰陽転換ごとに売買していったらどうか」

もちろん、規定は規定、応用は応用でよい。

しかし、「規定どおりにやる」というのは「自分の意志を殺す」ことだ。自分を殺す努力は、創造の努力と違って、まことにむごたらしくらい苦しい。なかなかできることではない。

だから、多くの人が中源線による売買の成果を十分に認めながら、また現実に利益が出ているのに、途中で放棄してしまう。

中源線の骨子さえ守れば、部分的には自分の意志を通してよい。また、そうしなければ長続きしない。

長続きすればこそ、大きな利を得られるのだ。中源線を知り、これをもとにして、相場で利益を得ようと志した目的を達成することができる。

しかし、自己を殺すことの難しさは、私自身、身にしみてわかっている。相場をする者として、自分の意志を通さなければ、相場の苦しみも喜びもないことも、よく承知している。

自己を殺して、相場の喜びを実感するのは不可能である。しかし、妥協の余地はある。それは、中源線に自己の相場技法を組み込むことである。

中源線には、相場の「技法」という言葉は出てこない。中源線そのものが技法を規格化したようなものだからだ。

自己を殺して規定に従いながら、相場の喜びを実感する手段は、上記の方法以外にない。

### **まずは規定どおりにやってみる**

自己の創造における苦しみと喜びを組み込む以外に、長続きする方法はない。

現実には、どうしたらよいか。

自分に適したやり方、つまり長続きする“利用方法”を考え、その“利用方法”を自分の発展に沿って変えていくことである。

ただ、

自分に適した利用方法と

自分に適すると、自分自身が考えている利用方法は違うということが、なかなかわからない。

実際にやってみないと、自分がガマンできない点、自分が受け入れられる点などが、わからないのである。

実際にやる前に、自分はこの点においては、もろ手をあげて賛成であるとか、この点は拒否しよう、などと思っていたとしても、実際にやってみ

ると、やる前に考えたこととあまりに違っていて、驚くくらいなのである。

だから、もし、

中源線を実行してみよう

あるいは

中源線の骨子を守り、そして自分に合致した相場技法によって長続きさせよう

という「決心」をしたなら、つまり、

中源線を利用して、利を得よう

と決めたなら、ある程度の期間は規定どおりにやってみなければならぬ。

具体的な規定や法示と現実のギャップについては、「相場をする者の立場から」で後述するが、まず、なまぬるいようではあるが、決められた資金量で、決められたように売買してみることをおすすめする。

そうすれば、ここで私が述べたことを十分に納得されるに違いない。

かく言う私ですら、一時は中源線そのものを疑っていたし、また顧みない時もあった。

その間、ほかのいろいろな方法を実験してみたのであるが、結局、中源線に戻ってきた。

そして、中源線を改良しようとしたのだが、私の改良は、あまりに慎重すぎたようである。

いいかげんな改良なら、しないほうがよい。のべ何百年かの統計を取って、すべての人が納得するようなものに仕上げたいという欲張った改良を望んだ。すなわち、客観的に完ぺきを求めすぎたのである。

客観性を求めなくてよいのなら、もっと大胆な改良をしてもよかったと思っている。

もちろん、確率を犠牲にしてはならない。だが、個人の相場技法を大きく取り入れて利益を上げられるのなら、確率をある程度、犠牲にしてよいくらいに思っているのだが、どうであろうか。